

平成17年御嵩町議会第4回定例会町長あいさつ

平成17年11月29日

今年最後の定例会開催に当り、所感の一端を述べたいと思います。

この1年の回顧をするには、少々早すぎるかとも思いますが、この1年を振り返りながら展望をしてみたいと存じます。

このところ、いわゆる建物の耐震強度偽造事件が全国的に大問題となっていますが、こと人命に関わる問題であること、安全・安心への期待と信頼を根底から裏切る行為であることから、極めて重大な問題であり、もはや、犯罪的事件といって差し支えないと思います。人間の命より“カネ”を優先させる発想は到底、許されるべきではなく、徹底的な究明、さらには、被害者の救済が必要と考えているところであります。

類似の地域の事件として、フェロシルト事件があります。御嵩町ではフェロシルトは発見されませんでした。周辺の可児・土岐・瑞浪・美濃加茂の各市では、大量のフェロシルトが確認され、地域住民の安全・安心を脅かしています。

企業が組織的に産業廃棄物を産業廃棄物ではないと偽って投棄したとすれば、これは犯罪以外の何ものでもありません。

石原産業は人々の信頼を裏切ったことになりませんが、古い過去にも四日市市において公害問題を起こした前歴があり、やはり企業には体質があるのだと、当時の四日市公害を知る者として、思いを深くしているところであります。

それにしましても、最近の日本の「信用崩壊現象」は、目をおおいたくなるほどです。口では正義を説きながら、自ら法違反を犯して不当な利益を得る政治家など、もっての外であります。

私は常々、行政の究極の目標は、安全・安心の町づくりであり、行政は人の信頼を失うようなことはしてはならないと、戒めています。最近の様々な事件をもって、改めて他山の石としたいと考えています。

今年は国内政治においては、まさに大激動の年でありました。

総選挙において、自民党が圧倒的な勝利を収める結果になりましたが、そこに至る過程では、郵政民営化法案に反対した議員は公認せず、しかも「刺客」といわれる対立候補が立候補するなど、前代未聞の選挙になりました。

改革には絶えず抵抗が伴います。

「抵抗勢力は排除する」というのは判らないでもありませんが、その手法が強権的になり過ぎると、危険につながります。

総選挙の余波は、いまなお続いています。とりわけ、岐阜県地方政界への影響は大きく、いま、この2・3日が大きな転換点になりそうです。

所詮、岐阜県の自民党というコップの中の嵐ということもできますが、長年にわたって保守王国、自民王国であった岐阜県地方政治にとっては、大きな震動であります。

新しく古田知事が選ばれ、新体制が発足したことも見逃せません。

就任早々、県政の「総点検」に着手されたのは、改革への決意と勇気を示したものと理解しています。

最近の古田知事と町村長の懇談会の席上、私は「トップが変われば、こうも変わるのか」という感想を述べ、いくつかの例をあげて評価するとともに、激励をしたところでもあります。

いずれにせよ、政治は中央、地方を問わず、目に見える形で地殻変動が始まっているものと認識しています。この地殻変動は、かなり強い不可逆性をもっていると思っています。

政治的地殻変動の時期だけに、良くも悪くも安定した政治は望むべくもありません。

社会保障が大幅にカットされるなかで、三位一体の改革なるものも、大詰めの段階にきても、はっきり示されておらず、とても期待はできません。

こうした混沌の時期であるからこそ、注意深く状況を見守りつつ、地道に足元を固める町政が必要であると認識しているところでもあります。

いまの御嵩町が誕生して今年で半世紀、50年の節目の年でしたが、御嵩町にとって新たな展望が開けた年でもありました。

3月、東海環状自動車道が開通しました。

御嵩町は400年来、東西を走る中山道一本に頼って生きてきました。そこへ南北に貫く幹線道路ができ、御嵩町は東西南北に開けた十字路の町になったのです。

昔から世界的に、文明にしても、人の交流にしても、通商にしても、十字路の地域は繁栄してきました。

御嵩町が十字路の町になったことは、まさに歴史的なことで、いまはそれを実感していない人でも、いずれは意味が判るときがくると思います。

とりわけ東海環状自動車道によって、南への展望が開けたことは、御嵩町の将来にとって意義があります。

先日おこなわれた「グリーンテクノみたけ」工業団地の大豊岐阜新工場の完成式でも、豊田市からやってきた人が、「自宅から工場まで Door to Door で45分」といっていましたが、いま日本の経済を引っ張っている自動車産業、なかでも近く世界一の売り上げになるといわれているトヨタの本拠地と直結したことは、御嵩町にとって大いなる追い風であります。

「グリーンテクノみたけ」工業団地への企業誘致が、完結の見通しがついたこと

も、御嵩町50周年を飾るにふさわしいことであります。

バブル経済の絶頂期に計画されたものの、完成したのはバブル経済崩壊後の惨たんたる不況のさなかという、不運な工業団地をどうするか、率直に言って、一時は途方に暮れました。

最近、山口県小郡の人と会ったとき、工業団地のことが話題になりましたが、山口県では「工業団地が完成しても、工場の誘致がいっこうに進まないため、刑務所を誘致した」とのことでした。

そうしたなかで、我が「グリーンテクノみたけ」では、幸運にも優良企業の進出が続き、このほど、残っていた用地についても、売り先予定の企業と話がつきました。正式な契約等の手続きはこれからですが、これで企業誘致完結のメドが立ったこととなります。

日本の経済の原点は、なんといっても「モノづくり」にあると思います。

日本の奇跡の経済高度成長の原動力になったのは、紛れもなく「モノづくり」であります。その後、「株だ、土地だ」と浮かれてバブルになり、そのバブルが無残にはじけてしまったことは、ご承知のとおりであります。したがって、モノづくりの原点に立ち返ることこそが、日本経済再生の唯一の途と信じています。

そのモノづくりの状況を表す経済指標に、製造品出荷額がありますが、統計が整っている平成11年度から6年間の御嵩町の製造品出荷額は、380億円から668億円と、実に75.8パーセントの伸びを示しています。可児・加茂地方と東濃西部の8つの市と町のなかでは、断然トップの伸び率であります。この数字は今後、新しく完成した「グリーンテクノみたけ」工場群の操業加速によって、さらに伸びることが期待されています。

今後は、「グリーンテクノみたけ」に隣接する平芝工業団地の有効利用、一体的活動によって、モノづくりの有力拠点に育てたいと考えているところであります。

については、国道21号バイパスの東への延長も急速に前倒しで進める必要があり、要望活動をしているところであります。

伸びる話があって、つづいて縮む話では混乱するかも知れませんが、この10月におこなわれた国勢調査の速報値によりますと、御嵩町の人口は1万9,271人で、5年前の国勢調査時に比べて、382人の減少となっています。

日本の人口は間もなく急速な減少に入ることは、以前から予測されており、すでに減少傾向に入っているのではないかと観測があります。

そうしたなかで、御嵩町の人口が5年前に比べて1.94パーセントの減少といっても、さほど驚くことではなく、可児・加茂8町村は軒並み減少で、白川・七宗両町は6パーセント超、隣の八百津町も5パーセント超の減少になっているのに比べれば、御嵩町の減少率は少ないとも読めます。因みに、美濃加茂、可児両市のデータは集計中とのことでもあります。

私は人口の減少が、直ちにその国なり地域の衰退を意味するものではないと思っていますが、急速な人口の減少は、望ましくありません。

今後、工業団地の企業活動に伴う人口の社会増がどのくらい期待できるのか、少子化がどの程度防げるのか、注意深く対策を採っていくべきと考えているところがあります。

いま、日本の国家財政は破綻といっても差し支えありません。全国の自治体においても、一部の例外を除き、合併したところも合併しなかったところも、どこも財政難に苦しんでいます。

御嵩町においても、例外ではありません。今後、財政状況を好転させるには、入りをはかり、出を抑えるしかありません。

入りをはかるといっても、町独自の増税はままならず、結局は企業活動による税の増収を期待しなければなりません。

一方、出を抑える方法としては、行財政の改革しかありません。

かねてから行政改革については、様々な角度から検討してきましたが、このほど素案がまとまりましたので、これからできる限り広く意見をいただき、成案を来年4月から実施に移したいと計画しています。

改革には、痛みや苦しみは必然的に伴います。非常の覚悟で粛々と改革を進めて参る所存です。

次に、個別の事業計画について説明いたします。

まず、アスベスト対策であります。

御嵩町では、アスベスト問題が明るみに出た直後から、住民の生命と健康を守ることを念頭に、いち早く調査と対策を検討してきましたが、調査の結果、26の施設でアスベスト建材が使用されていて、そのうち6施設8箇所が対策必要と判りました。

そこで、対策のなかでは最も安全な除去を選んで、対策を講じることになり、今回、補正予算として上程しました。

日本よりはるかに早くアスベスト規制がおこなわれたヨーロッパ各国ですら、対策が遅れたという批判がありますが、日本のアスベスト禍は、政府の規制の遅れから拡大してしまいました。

この点、アスベスト問題には国に大きな責任がありますので、先日の知事との懇談会の席上、「各自治体を実施するアスベスト対策の費用について国が助成するよう働きかけて欲しい」と、知事に要望しておきました。

次に、亜炭廃坑の地震対策についてであります。

御嵩町の中心部に広く分布する“負の遺産”、亜炭廃坑が、大地震の際にどのような挙動をするか、科学的に解明されておらず、場合によっては甚大な震害をもたらす

可能性があります。

そこで、御嵩町では基礎的な予備調査を重ねてきましたが、今後、詳細な本調査をするには、莫大な費用が必要でありますので、かねてから国や県と交渉を重ねて参りましたが、ようやく「特定鉱害復旧事業等基金」を活用してボーリングなど本調査をする目途が立ちました。いま、具体的な調査計画をまとめているところであります。

何とか早急に調査を進め、大地震到来までに必要な対策を整えておきたいと願っています。

かねてから、懸案でありました町内の情報化については、NTT西日本との間で光ファイバー・ネットワーク構築の話が進み、各地区で住民説明会を開きました。

IT時代といわれるなか、御嵩町では予想以上の光ファイバーのニーズが高いようであります。情報化の基幹となる光ファイバーは、早急に整備する必要がありますので、この絶好の機会に事業を推進したいと考えています。

年の瀬をひかえて、今年の来し方、行く末を思い浮かべますと、御嵩町の将来は決して暗くはなく、むしろ明るいと思います。

物心両面といいますが、物的なことのほか、心の点でも御嵩の将来を明るくするようなことが続いています。

この一年、旧御嵩の町なかは夜、とても明るくなりました。全部合わせて48灯の街路灯ができたのです。

御嵩町では、安全・安心の町づくりの一環として、防犯灯への補助金を増額しましたが、思ったほど効果がありませんでした。

ところが、今年になって地元の方々の自発的な意思によって、次々と街路灯が新設されたのです。

御嵩の町なかの商店街の衰退がいわれて久しいのですが、その商店街の夜が明るくなったのです。

自己負担をして街灯をつけても、直ちに商店街の活性化が可能となるとは考えられませんが、主に、夜に通行する人々のために、つまり公共のために街灯をつけたわけで、その心意気がなんとも明るく、嬉しいのです。この場を借りて、街灯をつけてくれた人々にお礼を申し上げます。

こうした動きに刺激されて、町としても新年度から「女性でも一人でも歩ける夜の町」を目指して、本格的な街灯増設制度をつくり、治安維持の一助にもしたいと考えています。

この春、障害者施設「あゆみ館」が完成しましたが、元コンクリート工場の跡地であった事もあって、周辺は極めて殺風景であります。

そこで、人々の安らぎの空間を提供するために、鎮守の杜のような、小さいなが

らこんもりとした、緑のスペースをつくりたいと考え、御嵩町50周年記念事業の一つとして、浄財による植樹を呼びかけたところ、50人の町民の方々が応募してくれて、いろいろな木を植えました。

もちろん、私が見届けることは不可能とは思いますが、20年後、30年後には杜になることを夢見ています。

緑といえば、この前の日曜日のことですが、真名田親水公園に大勢の町民が集まって、コブシやモミジの植樹をしてくれました。

真名田親水公園は、いま冬枯れの風景ですが、格好の公園で、周回道路はウォーキングする人達で賑わっています。

町では、この公園をボランティアとして手入れしてくれる人々を募ったところ、55人の方々が応募してくれて、その活動の一つとして植樹となったのです。

今後、芝生の手入れなど交代でしていただけるということで、大変感謝しているところです。

「御嵩の緑を守ろう」という動きは、町外からもあります。

アサヒビール名古屋工場の人々が、この春から北山の一角に「水源の森」をつくる活動をはじめました。

また、最近、自動車販売会社から「5万本の植樹をしたい」というお申し出があり、先日、この会社の社長と会って「お受けしたい。地元として受け入れ体制をつくる」と、答えておきました。

こうしたボランティアや奇特定の申し出は、極めて貴重な志であります。こうした心を大切に、大きく育てて結実させたいものであります。

今回、提案する案件は、報告2件、人権擁護委員の推薦、御嵩町職員の給与に関する条例等の一部を改正する条例の制定ほか条例関係、一般会計補正予算など併せて13件であります。

補正予算案など具体的な内容については、後ほど担当者がご説明いたします。よろしく申し上げます。